



日本盆栽作家協会会報

第17号

平成21年12月1日



第17回作家展

会期／平成20年12月4日(木)～9日(火)
 会場／春花園 BONSAI 美術館
 主催／日本盆栽作家協会

作家精神の高揚と研究・研鑽及び盆栽作家の社会的地位の確立を目的として開催される作家展も回を重ね、17回展が盛大に開催されました。大変素晴らしい作品がそろい、これからの更なる研鑽と発展が楽しみです。



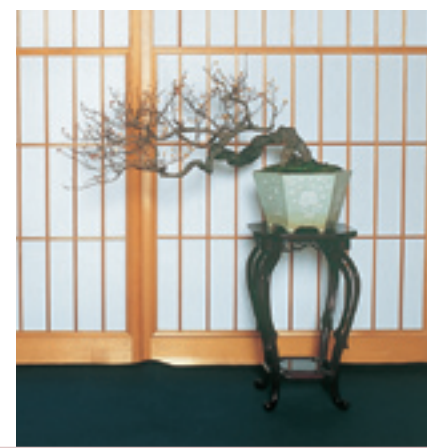
黒松(青竜) 小林國雄 古渡烏泥木瓜式



うめもどき石付 野上寿明
和楯円



五葉松 今井千春 百日紅



ツルウメモドキ 山田香織
青磁八角



杉(銘 太郎杉) 山田登美男
舟山楯円

「至言」



日本盆栽作家協会会長

山田登美男



日本の芸術は、自然を圧縮凝集するように思われる。日本人ほど、四季の自然に感情が影響され、また心情を自然に仮托するものは世界にあまり無い。そして広い自然をミニチュア化する芸術は世界一である。

和歌、俳句の短詩がいか自然の詠難に発しているかを見るがよい。庭園、盆栽もそうである。こうした縮図形式は容易に旅に出られなかった往時の日本人が

日常生活の中に「自然」を持ち込み、それを鑑賞する希求から生まれたと思うと述べられている。

ここで注目すべきは、日本の和歌や俳句のように短詩で盆と栽で自然界の美、山、水、風、月で表現創作する形式盆栽は日本庭園、盆景がそうであるように往時の日本人は容易に旅に出られなかったから日常生活の中に自然を持ち込み、それを鑑賞する希求から生まれたと思うと述べられている。

今回は、日本を代表する小説家の一人、松本清張氏の生誕一〇〇年を記念し、彼の盆栽観を紹介します。

盆栽は、自然美の縮図として次のように述べられています。

日常生活の中に「自然」を持ち込み、それを鑑賞する希求から生まれたと思うのだが、なかでも盆栽は自然を象徴する樹木によって深山幽谷や高原を現している。これを見ると居ながらにして心が幽かな山野に遊ぶのである。

五葉松
須藤雨伯
古渡烏泥楕円



五葉松石付
鈴木英夫
銅水盤

山柿
阿部健一
和輪花



真柏 江田博
紫泥外縁丸





(日本盆栽作家協会常任幹事)
小林 國雄



SAKKA TEN 2008 イタリア大会

●約2万人の町ブレッサノーネ

アルゼンチンから帰国した、次の日に(11月13日)にイタリアのブレッサノーネへと向かった。そこは国境近くの北部なのでドイツのミュンヘン空港がもっとも近い。出迎えにはヨーロッパ盆栽作家協会々長のアウエル氏が来てくれた。

車で約3時間走りオーストリアを通り抜け、山の上の古いレストランで、運営委員会のロッシ夫妻と待ち合わせ、そこで夕食をとった。会場のホテルはキリスト教会が運営するもので、以前は神学生の寮であったと聞く。どろりで私の部屋も小さくて、壁にはキリストの像が掛かっていた。

●床の間飾りの展示会

何よりも感動した事は、そのホテルの集会場の両側に九尺幅の床の間を作り一席ごと盆栽が飾られていた。席飾りの定法どおり勝手と流れ、掛軸、添景などのしつらえ方にもまったく隙のない素晴らしい飾りがされていた。

これほどまで高いレベルに達しているのには、正直いつて驚かされた。

また、もう一点感心した事は、展示された作品に賞を与えない事である。彼らの考えは「賞はたしかに励みにはなるが、功罪もある。盆栽の本来あるべき道を忘れ

た。実の本質が損なわれる」と言う。彼らはこのような高い次元で、真摯に盆栽に対峙しているのだ。

伝統ある、日本の盆栽界も原点に帰り、盆栽道の本来あるべき姿を見直すべき、盆栽復興の時代に入っているのではないだろうか。

●大自然との出会いも楽しみ

ブレッサノーネは山に囲まれた美しい小さな町だった。大会々長のバッマンさんの盆栽棚を通訳の上田初美さんと見に行った。彼の家は山の上の素晴らしい所であった。近くで山取りも出来るそうである。

アウエル氏に景道の講義を依頼され、彼の園で40名近くの勉強会が開かれた。園は広大で山取りや、日本から輸入された盆栽が沢山あった。サツキも数鉢あったが、モミジやカエデなどが多かった。

ヨーロッパでは現在マダラカミキリが輸入した盆栽から発生し、雑木類の輸入も難しくなったので、園にあるモミジは売りにくいと聞いていた。

すべての仕事が終わって、雪山に登ることになった。3000m級の山々の近くまで車で行き、そこから歩きはじめた。新雪のドロミティの山々はキラキラとまばゆき美しかった。海外講演での楽しみは、盆栽を心から愛する人々との邂逅(かいこう)と、雄大な自然を見て心洗われる事である。

※ P14-15のカラー頁もご参照下さい。

ブレッサノーネ風景



(上) 講習風景



(上) テープカット、(右) 展示場風景





第2回 中国唐風盆景展



役員一同



筆者



山田会長



会議風景



展示場風景

リボンを付け、とても華やかな展示会である。先週行ってきたイタリアの賞も所蔵者の名前も付けない展示会とはまったく逆の考え方である。

十月一日には、会場内の会議室で「中日盆景研究会」が我々三名と二十名くらいの支部の役員によって行われた。世界のこれからの盆栽の行方や、文人木や景道、若者がどうしたら興味を持つのだろうか、等々である。

午後からは、秦の始皇帝が築いた兵馬俑を見学した。中国の大きさを知る、いい勉強になった。

(日本盆栽作家協会常任幹事 小林國雄 記)

※ P14-15のカラー頁もご参照下さい。

中国、西安の唐苑で開催した「中国唐風盆景展」に、日本盆栽作家協会が招待され、山田代表と私と、造園関係で星野氏の3名で、9月29日夕方、成田を出発した。

唐苑は、広大な敷地であり、また展示会場も大きかった。大型盆栽が多く、全席で三百点も飾られていた。かなり遠方からの出品も多いという。日本の国風展を少し大きくしたものである。

陳列された作品に賞が付けれられ、トップには金無垢の重たいメダルが贈られ、二位には銀、三位には銅で受賞樹には



サン・ミケーレ・アッラディジェ



(日本盆栽作家協会常任幹事)

小林 國雄

ITALIAN NATIONAL CONGRESS

盆栽 イタリア国際大会

今年の盆栽ヨーロッパは、イタリア北部のサンミケレアラ
ディジェという人口三千人弱の小さな町で開催された。

その大会に講師として派遣された私は、9月17日、フラン
クフルト経由でベニスへ。空港には以前通訳をしていたいた、
上田初美さんとご主人のアルド・トリニさんが迎えに来て
くれた。会場は、トレント州の民族博物館である、12世紀に
修道院として建築されたもので、その場所はかなり高地で
山麓は見渡す限り一面のブドウ畑であった。

一席ごと青氈の敷物がしかれ、そこに盆栽が心を込めて
飾られてある。だが、驚いたことに盆栽の樹種名は、表記さ
れているが、所蔵者の名前が無いのである。なぜそうするの
か聞いたところ、所蔵者が誰だか分かったと、「そこに私感が
入る」という考え方である。

現在、ヨーロッパ作家協会の会員は、百七十名いて、またま
だ増えているが、誰でも会員になれる訳ではないという。技
術が優れていても、盆栽を沢山持つていても、盆栽を愛好す
る「心のあり方」の違う人は会員にはなれないという。

今回の大会では、ワークショップ一回と三度のデモンスト
レーションが行われた。通訳をしていたいた、トリニ先生
も「美術・芸術・技術」についての講演を行った。

最終日は、会場をホテルに移し、盆栽を飾る作法「景道」
の勉強会であった。今回とてもハードな仕事だったが、愛好
者の熱意がひしひしと私に伝わってくるので気持ちは爽や
かであった。

愛好者の職業を興味を持って聞いてみると、警察官、郵便
局員、金属加工、医師、弁護士、大工、音楽家、有名ブランド
のデザイナー等であった。年齢も若く、平均年齢は、45才く

らいたという。デモンストレーションの時、手伝いをさせた二
人の少年は16才である。彼らにとって「マエストロ」小林と作
品を飾り上げた事は素晴らしい思い出となるだろう。

全ての仕事が終わわり、山の上にある樹齢二千年のカラマツ
の巨木を見に行く事となった。会長のリゴッティさんとロッ
シー夫妻とトリニ夫妻の六名で標高千六百メートルの場
所まで車で向かった。どこまでも続くブドウ畑を抜けると、
今度はリング畑がどこまでも広がっている。

やがて、切り立った山の間をすり抜け、巨木のある場所に
着く。カラマツは三本有り、その内の一本は雷が落ちた空は空
洞となっていた。屋久島のウイソク株のように中から見上
げると空が見えた。八方根張りで二番太い樹は、空高く威
風堂々とした姿で我々を迎えてくれた。「すごい」の一言であ
る、樹の中に神が宿っているような神秘的なものが感じら
れる。

標高二千メートルにある湖で昼食をとる、目の前には四
千メートル近い山がそびえ、残雪も見える。雄大な景色を
後にして、その夜はロッシーさんの家の近くのホテルに泊まる。
帰る朝、ロッシーさんの盆栽園を拝見する。彼は以前、音
楽家でオボエの奏者だった。今は盆栽教室を開いて、多くの
生徒がいるそうである。庭には山取りの素晴らしい樹から
自分でさ芽をした物、日本から来た臯月の新木も沢山あっ
た。

今、ヨーロッパで盆栽が隆盛を極めてるのは、彼のような
情熱を盆栽に燃やせる人が多くいるからである。

※ P14-15のカラー頁もご参照下さい。



(上)大会プログラム 表紙
(右上)実習風景
(右)イタリアメンバーと食事会



(左3点)イタリア風景



(上)(右)講習風景と(右上)展示場風景

幻の花「茶青梅」

山田登美男

寒空に、馥郁たる香とともに咲く梅の花は、清楚で美しい。
今年も、例年より2週間ほど早く季節が動いているようだが、これも暖冬の影響なのであろうか。

花咲爺が「枯れ木に花を咲かせましよう」という、ほほ笑ましい昔話があるが、桜の前に咲く梅の花も、東洋の神秘として大変に人気の高い植物である。

古来、四季に恵まれた日本で、冬になると春の訪れを待ちわびて、梅一輪一輪の開花に暖かさを感じてきたのも、自然の成り行きかもしれない。梅の寿命は大変に永く、最後は樹皮一枚でも生きる、すさまじい生命力を備えている。

しかし、自生地は絶えつつある。九州地方の「天草野梅」、奈良県と和歌山県の間地に自生する「大和野梅」、山梨県の「甲州野梅」などが有名である。

関東地方「青梅野梅」などがあり、江戸時代には盛んに交配され、200種類の番付表も作られている。

現在は約30種と思われる。私どもの盆栽園「清香園」では、昔から名花と言われる梅の種類を研究してきた。明治、大正時代に大人気だった名花「茶青梅」は現在、幻の花とされる。探しているがなかなか見つからない。

今、市場に出ている茶青梅については新茶

青梅であり、残念ながら本物ではないようだ。本物は太輪で青白としている。是非、鉢植えの梅、梅の盆栽「盆梅」にして、後世に残してあげないといけないと考えている。



黒松
田中泰道
山秋丸



クチナシ
アウエル・オートマ(イタリア)
広東長方



真柏 吹田勇雄
紫泥丸



ヒメモウソウ
山田寅幸
常滑焼丸



山もみじ カスタニエーリ(イタリア)
白交趾楕円



SAKKA TEN 2008 イタリア大会

2008年11月14日から16日まで、イタリア・ブレッサノーネにて、SAKKA TEN 2008 イタリア大会が開催されました。

日本盆栽作家協会から、小林國雄氏が講師として派遣されました。現地の歴史ある教会施設を会場としており、建物の趣と盆栽がマッチした味わいのある雰囲気が漂う中、実演にも多くの人が聴講に訪れていました。

(P 6 詳細をご覧ください。)



会場となった教会

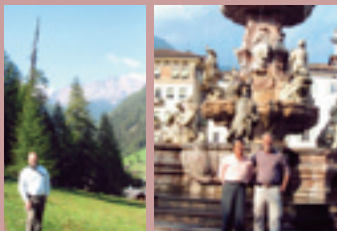


展示場風景

第2回 中国唐風盆景展



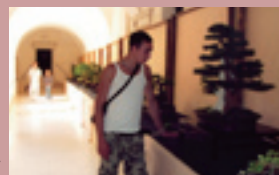
山田会長と小林氏と現地役員一同。



(上)現地風景 (下)実演会場風景



実演風景



展示場風景

イタリア国際大会

2009年9月18日から21日に、イタリア北部の自然豊かな町 サン・ミケーレ・アッラディジェにて、盆栽イタリア国際大会が盛大に開催されました。会場は、12世紀に修道院として建設された民族博物館で歴史の重みを感じられました。

(P 10 詳細をご覧ください)



(上)会場入口

2009年9月29日から10月4日に渡って、中国・西安にて中国唐風盆景展が盛大に開催されました。(P 8 詳細をご覧ください)

